



日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部  
**NEWS LETTER**

2022年7月8日発行 第81号  
事務局長 小島 彬  
TEL/FAX : 077-589-3724  
Email : akrkojima@ybb.ne.jp

**【紹介】 語る人と伝える人**

**滋賀県立大学会員 坂本輝世**

昨年、ある研究会で、アメリカの作家・詩人の書いたエッセイやスピーチの小さなアンソロジー（『アメリカの声をひろう』ナカニシヤ出版）の編集に参加する機会をいただいた。その中の一つ、奴隷として生まれた黒人女性、ソウジャーナ・トゥルース (Sojourner Truth : 1797?~1883) のスピーチと、それを書き残した白人女性フランシス・ゲージ (Frances Gage : 1808~1884) についてご紹介したい。

19世紀半ば、米国では女性の権利拡大を求める運動集会在各地で開かれていた。その一つ、1851年5月29日オハイオ州アクロンでの集会で、ソウジャーナ・トゥルースは、”Ain’ t I a woman?” 「あたしや女じゃないのかい」というリフレインで知られることになるスピーチを行う。このスピーチは、1863年の「ジ・インディペンデント」紙に、集会議長を務めたフランシス・ゲージの書いた回想録で紹介されたことで、大きな反響を呼ぶことになった。

ゲージの回想録によると、1851年の集会には女性の権利拡大を否定する白人男性も多く参加していた。2日目に、キリスト教の牧師たちが代わる代わる立って発言し、「女性の脆弱さ」、「知的能力の低さ」、イエスとその弟子がすべて男性であること、などを根拠に、女性が男性と同じ権利を持つことはあり得ない、と主張し、会場の雰囲気支配しつつあった。そのときトゥルースが立ち上がる。会場ではブーイングの声が上がり、女権論者である白人女性たちさえも彼女の発言を制止しようとする中、ゲージはトゥルースに発言を許可する。静まりかえった会場にトゥルースの声が深く響いた、とゲージは書いている。

「(前略) しかしまあ、ここじゃいったい、なんの話をしてるんだい？ あそこにいる男が言ったよね。女は、馬車に乗るにも、溝を越えるにも一人じゃ無理で、どこに行ったっていちばんいい席に座らせてもらって。あたしを馬車に乗ってくれた人なんか、

いやしないよ。ぬかるみで手を貸してくれたり、いちばんいい席を空けてくれたり、そんな人は、今まで一人だっっていやしないよ！」 「で、あたしや女じゃないのかい？ あたしを見なよ、あたしの腕を！」

「畑を耕して、植え付けをして、収穫を納屋に運びこんで、あたしに太刀打ちできる男はいなかったよ！ で、あたしや女じゃないのかい？ 男とおんなじに働けて、おんなじくらい食べれたさ。食べ物にありつければね。鞭で打たれる時だって、男とおんなじに辛抱したさ！ で、あたしや女じゃないのかい？ (…）」

「で、あそこの黒い服着たちっちゃい男ね、あの人は、女は男とおんなじ権利は持てない、なぜかっていうとキリストは女じゃなかったから、って言うんだよ！ あんたのキリストは、どっから生まれたのさ？」 「あんたのキリストはどっから生まれたのさ？ 神様と女からだよ！ 男はキリストと何の関係もなかったんだよ。」 (後略)

男女同権を主張する女性たちの中にも根強くあった (そして今もあり続けるかもしれない)、白人中産階級の女性を女性の標準・理想とする価値観や、キリスト教に基づく (とされる) 女性観 — トゥルースのスピーチはこれらに異議を唱えたものであり、それが、元奴隷の黒人女性の経験と生活から発せられたことにゲージは感銘を受けたのだった。こうして、”Ain’ t I a woman?” 「あたしや女じゃないのかい」 はアメリカの非白人 (を含む) フェミニズム運動の合言葉となり、アメリカ黒人女性の立場からフェミニズムを論じたベル・フックスの、初期の著作のタイトルともなった。

しかし、歴史学者 N. I. Painter の *Sojourner Truth: A Life, A Symbol* (1996) に論じられているように、ゲージの「回想」は、トゥルースのスピーチを基にしたながらも、その語りを南部黒人英語風に改変し、「あたしや女じゃないのかい」の繰り返しを「加筆」したものである可能性が非常に高い。トゥルースは読み書きができず、彼女の言葉とされるものは、自伝を含め

て全て、他者の手によるものである。実際にトゥルースがどんな言葉をどのように語ったのか、原稿や録音で知るすべはない。

ゲージの行ったような「改竄」は許されるものではない、という当然の批判がある一方で、ゲージの「回想」無しには、トゥルースのスピーチの持つ力が後世に伝わり、大きな影響力を持つこともなかったと考えられる。Painter が言うように、すべての資料、すべての文書は、その対象と特定の関係を持った人によって残され、それが存在するようになった理由をもっている。ゲージは上流階級出身ではなく開拓農民の子として育ち、奴隷解放・男女同権・禁酒運動に一生を捧げ、それによって迫害も受けた。ゲージの書き残した「トゥルースのスピーチ」からは、語った人トゥルースだけではなく、伝えた人ゲージについても、多くの事柄を読み取ることができるように思われる。

## 【論考】統計データ不正防止策を考える

### 大畑智史(三重短期大学、元滋賀支部)

近年、日本でも国家政府の統計データ不正問題が深刻化している。この問題の主な事例としては、国土交通省における建設業関係の受注データの書き換えや二重計上、厚生労働省における勤労統計データの不正な書き換え、などの不正がある。政府が公表するような各種統計データの国家的政策への影響などの点を考慮すると、その適正化などのため当該不正は早急に解決されるべきである。

国家政府レベルでの統計データ不正の原因として、統計データ作成職員の責任感の欠如、などの当該職員の道徳面がよく取り上げられる。確かに、国土交通省における建設業関係のデータの不正な書き換えの件でも、会計検査院による統計データ上の不備が指摘されながら当該不正は一部続けられた、などの事実を考慮するとそれは不自然ではない。ただ、当該職員がそうした状況に陥った要因は多面的に分析されるべきである。その原因として、主に、統計データ作成職員の体力的に過酷な勤務条件、統計的能力の視点からの人材配置の不適切性や不正の隠蔽体質などのその関係の政府における組織面の不適切性、煩雑な統計データ業務における ICT (Information and Communication Technology : 情報通信技術) 化の不十分性、といった事柄が考えられる。こうしたことは、先に示した厚生

労働省や国土交通省関係の統計データ不正問題の議論の際に指摘されたことである。この状況の検討の際には、近年の統計予算の削減傾向も考慮されるべきである。

統計データ不正の原因の根本に何があるか。日本では、全体として、公的な活動に対する国民からの信頼があまりえられていない。この原因としては、公金の使途の不透明性、公的活動の成果への国民の不満、縦割り行政による弊害の除去などの変革の困難さ、公的主体におけるこの既得権益の維持やその拡大の重視などが挙げられる。公的活動への国民全体の以上のような認識があると、公的活動における、表立って明瞭でない不正の横行、形だけの成果形成、という問題点の改善は当然期待できず、先に指摘した、統計データ業務の職員の過酷な勤務条件などの統計データ不正の諸原因もなかなか改善に向かわない。

統計データ不正防止策についてはその根本的要因の解消が重要である。その解消策の一つは、統計データ利活用も込めた省庁横断的な取組みが推進される中で、各省庁の統計部署が公的主体の各部署との間で存在意義を相互に確認し、ICT システムも活用しつつその両者間での相互連携を深めることである。このような中で、統計データ業務も、相互監視といった状況下で、より効果的な成果を出せるようになる。もちろん、当該統計部署と企業などの民間の主体との間でもそのような形で相互連携を深めるべきである。以上のような取組みが公的組織全体でなされると、その分、各省庁の統計部署も込めた公的主体とそれ以外の社会の各主体との信頼関係が深まり、公的組織全体がより高度にその役割を果たすために存在でき、そこで勤務する職員は、職務そのものの適正な遂行に集中できるようになる。当然、以上のような統計データ不正の根本的解消策の効果など、その関係諸点の更なる分析が求められる。

日本で国家政府レベルでの統計データ不正が以後生じないよう、そこにある根本的要因を解消するために、各省庁の統計部署と公的主体の各部署との間や、当該統計部署と企業などの民間の主体との間の相互連携を深めるべきであると述べたが、こうした取組みの効果は、統計データ不正解消に留まらず、税の持つ役割への期待が前面に出た国民による納税行動の普及など、社会の多様な場面で現れると考えられる。